

1. はじめに

中世ヨーロッパはキリスト教世界といわれる。そこでは、キリスト教が社会のあらゆる分野に大きな影響力を持っていた。その住民のほとんどがキリスト教徒であり、教会に従っていた。しかし、キリスト教徒でない人々もヨーロッパで暮らしていた。ユダヤ人はあちこちにいたし、ムスリムも数は限られ、地域的にも限定されていたが、存在した。イベリア半島とシチリア島とともに、ムスリムが征服したところをキリスト教徒が奪回した地域であり、そこに残留したムスリムも少なくなかった。

ヨーロッパ中世と言うと十字軍の時代であり、宗教的には不寛容の時代とされる。そのような時代にイベリア半島やシチリア島ではキリスト教徒支配下にムスリムがいた、しかも彼らは一定の自治を認められ、信仰や財産を保証されていた。そのため、2つの地域は異文化共存の地とか宗教的寛容の地と言われてきた。

しかし、近年、このような理解はおおきく変わろうとしている。最近の研究動向では、両者の共存の状況を寛容 *tolerantia* ではなく、有用性 *utilitas* の観点から理解すべきとの主張が現れている。

彼らはキリスト教徒支配下で宗教的寛容を享受してきたのであろうか。その実態はどうだったのか。彼らはどのように暮らしたのか。キリスト教徒は彼らにどのように対応したのか。イスラム教の信仰は守られたのか。

本稿では、そのような研究動向をふまえながら、イベリア半島、シチリア島における状況を検討することによって中世ヨーロッパのキリスト教徒が支配下のムスリムに対してどのように対応したかを考察する。

2. イベリア半島のムスリム

8世紀にイベリア半島を征服したイスラム勢力に対し、キリスト教徒は国土回復を目指してレコ

ンキスタを推進したと言われる。11世紀以降、イスラム勢力が分裂して小国家であるタイファ乱立状態となる中、キリスト教勢力が攻勢に立ち、1085年には西ゴート王国の都であったトレドを奪還した。

これに対して、タイファ諸国は北アフリカのベルベル人のムラービト朝、そしてムワヒド朝に助けを求め、その介入を招くことになる。キリスト教諸国は、13世紀には優位を確立し、1212年ラス・ナバス・デ・トロサの戦いで勝利を収めた後、1236年にコルドバ、1248年にはセビリアを占領し、残されたグラナダのナスル朝も1492年にスペインの軍門に下りレコンキスタが完成することとなる。

レコンキスタは一般にキリスト教徒がイスラム教徒からイベリア半島を奪還する運動と解される。従って、レコンキスタは十字軍的な側面をもった宗教的活動と見られてきた。では、レコンキスタは宗教を最大の要因とする軍事活動だったのであろうか。

レコンキスタに宗教的側面がまったくなかったわけではない。9世紀に聖ヤコブ崇敬が現れ、ムスリムとの戦いにおいてこの聖人の加護を求める意識が生まれた。聖ヤコブの墓が発見されるとされるサンチャゴ・デ・コンポステラは重要な巡礼地となった。11世紀末には十字軍思想の影響も受けた。教皇権は、ムスリムとの戦いをキリスト教徒の宗教的義務とした。サラゴサを占領したアラゴン王アルフォンソ1世は、十字軍思想に取り憑かれ、エルサレムにまで攻め上ることを夢見ていた。12世紀半ばのカスティリア王アルフォンソ7世がアンダルシアへの遠征でモスクを焼き払ったことも、聖戦思想の表れと見られる。

一方、ムスリム側でも、10世紀末に後ウマイヤ朝の宰相として実権を掌握したマンスールはキリスト教徒との戦いをジハード（聖戦）と位置づけた。彼はサンチャゴ・デ・コンポステラを襲って、

教会の鐘をコルドバに持ち帰った。アフリカからイベリア半島に介入したムラービト朝やムワッヒド朝も、異教徒であるキリスト教徒にあからさまな敵意を抱いていた。

しかし、宗教的対立が常に主要な原因であったとは言えない。まず、それぞれが結束し、一致団結して戦ったということではなかった。キリスト教徒側は、大部分がスペインとして統一されたのはレコンキスタが完成する直前の1479年で、それまではアラゴンやカスティリア、ナバラなどいくつかの国に分かれ、しばしば対立していた。血を分けた兄弟間で対立することも珍しくなかった。このような内部での対立が、レコンキスタの進展を遅らせたことは間違いない。

一方イスラム側も、イベリア半島に侵攻して以来、一枚岩ではなく、後ウマイヤ朝滅亡後は小国家であるタイファに分裂して抗争し、ムラービト朝やムワッヒド朝の時代になると、現地系のムスリムとベルベル人の対立があった。このように双方とも、一致団結にはほど遠い状況であった。

もともと、たとえ内部に対立を抱えていても、共通の敵に対して結束できるなら、レコンキスタは宗教戦争といえるであろう。しかし、キリスト教徒もムスリムも異教徒を前にしてさえ同胞同士で対立するだけでなく、異教徒と結んで行動することさえ、ためらわなかった。

そもそもムスリムがイベリア半島に侵入するきっかけとなったのは、西ゴート王国においてロデリックとアギラの王位継承争いがあり、劣勢となったアギラがムスリムに救援を求めたことであったと伝えられている。

キリスト教徒同士の対立でムスリムの支援を求めることはいわゆるレコンキスタの時代になっても起こっている。958年、王位を奪われたレオン王サンチョ1世は後ウマイヤ朝のカリフ、アブド・アッラフマーン3世の支援を得て2年後に復位している。その後彼は復位後カリフに反旗を翻し、支援の代償を反古にしたため、アブド・アッラフマーン3世はサンチョに王位を奪われてコルドバに亡命してきたオルドーニョ4世を支援する

ことになる。レオン王ベルムード2世はサンチョ1世の息子で対立するラミロ3世と戦うため、キリスト教徒に対するジハードを唱えていた宰相マンスールの援軍を受けた。

マンスールの息子アブド・アルマリクの時代にも、カスティリア伯は後ウマイヤ朝の軍隊に入ってレオン王国攻撃に参加した。アブド・アルマリクの死後、後ウマイヤ朝の力が衰えて混乱期を迎えると、ムスリム同士の争いにバルセロナ伯の軍隊が傭兵として参加している。

1157年にレオン王となったフェルナンド2世はムワッヒド朝と結んでカスティリアに対抗した。ナバラ王国もムワッヒド朝と結んでカスティリアを攻めた。

12世紀末から13世紀初め、教皇はキリスト教徒側の結束を固めてムワッヒド朝に対抗するため、ナバラ王やレオン王にムワッヒド朝との関係を断ち切れ、カスティリア王と和解させねばならなかった。ローマ教皇がムスリムと結んだキリスト教徒の君主を破門することもあった。

ムスリムの方からキリスト教徒に支援を求めることもあった。後ウマイヤ朝に対する反乱では、反乱者がキリスト教徒と結びつき、軍事的支援を受けた。後ウマイヤ朝時代末期、ムハンマド2世とスレイマンという2人がカリフの地位をめぐる争ったが、前者はバルセロナ伯ら、後者はカスティリア伯の援助を受けた。後ウマイヤ朝滅亡後に生まれた多くのタイファは、貢納を行ってカスティリアやレオンの保護を受けた。1063年、アラゴン王ラミロ1世がサラゴサのイスラム教国を攻撃したとき、サラゴサはレオン・カスティリア王のフェルナンド1世に支援を要請し、これに応えたフェルナンドはアラゴンを撃ち破り、国王ラミロを戦死させている。トレド陥落後、タイファ諸国はキリスト教国の攻勢を防ぐために北アフリカのムラービト朝に支援を仰いだにもかかわらず、狂信的で好戦的なベルベル人に警戒心と反感を抱き、王の中にはカスティリアのアルフォンソ6世との連携を図る者さえいた。

このようにいわゆるレコンキスタの時代、キリ

スト教勢力もイスラム勢力も結束してはならず、異教徒と組んで宗教的同胞と戦うことさえ厭わなかった。従って、レコンキスタをキリスト教徒対ムスリムの宗教戦争と単純に理解することはできない。宗教は対立のひとつの要因ではあったが、最大の要因ではなかった。むしろ政治的要因、すなわち自分の領地や国土を守り、拡大することが最大の要因であったと考えるべきであろう。そのためには異教徒と手を結んだり、これを頼ったり、利用することも躊躇わなかった。13世紀後半のカスティリア王アルフォンソ10世(1252-1284)の甥であったドン・ファン・マヌエルはその『国家論』のなかで次のように書いている。「両教徒間の戦争は、キリスト教徒がムスリムによって不当に奪われた土地を回復するまで続くであろう、しかし宗教の違いのために戦争はないであろう、ムスリムとの戦いは彼らから受けた被害のためであって、彼らの宗教に対してではない」と。

次に、支配下にいたムスリムへのキリスト教徒の対応を見てみよう。キリスト教徒の征服地に残ったムスリムは、後にムデハルと呼ばれるようになる。

キリスト教徒がレコンキスタを進めていったとき、占領した地域のムスリムに対しどのように対応したのか。1085年、カスティリア王アルフォンソ6世はトレドを征服したとき、降伏したムスリムにさまざまな権利と自由を保証した。これ以後も激しく抵抗したり、反乱を起こしたりしたムスリムには厳しい対応がなされたが、条約を結んでムスリムの相応の権利と自由を認めるやり方は、多くのケースで踏襲された。

ではムデハルはキリスト教徒の支配下でどのように暮らしていたのであろうか。原則としてムスリムだけの共同体を形成し、キリスト教徒とは多くの場合棲み分けがあったようである。カスティリアではムデハルが少数であり、その多くは都市の職人であったが、アラゴンでは農村で暮らす農民が多かった。職人としては、建築、冶金、織物、皮革などの分野で活動していた。また、武器を製造したり、兵士としてキリスト教徒の軍隊に参加

したりすることもあった。

彼らの置かれた状況は、地域によって相違はあるが、おおざっぱに言うと、キリスト教徒の支配を受け入れ、人頭税を国王に納めるなら、生命、財産が保証された。財産を持って移住することも許された。彼らは自分たちの共同体を形成し、カーディーという裁判官らのもとでイスラム教のスナ(慣行)に従った一定の自治が認められた。信仰についても一定の自由が認められ、信仰を守り、子孫に受け継がせることが許され、モスクも、とくに大きなものは教会に改修されたが、残されたようである。

もちろん、征服された異教徒であるから、彼らが完全な自治権や信教の自由を享受できたわけではない。自治には限界もあった。カーディーが裁くのはムスリム同士の民事事件だけだった。また公職に就くこと、法廷などで証言すること、遺書を残すことなども認められなかった。ムスリムがキリスト教徒の土地を取得した場合は、十分の一税を納めなければならなかった。

宗教についても、公然たる礼拝は禁じられた。呼びかけ人であるムアジジンがアザーン、すなわち礼拝の時刻を呼びかけることも禁じられた。イスラム教の宗教行為がキリスト教徒の目に触れることは許されなかったのである。キリスト教徒をイスラム教に改宗させることももちろん許されず、改宗した者は厳しく罰せられた。また司教が聖体行列をするときには、ムスリムは隠れるか、跪かねばならないとされた。

キリスト教徒の支配下のムデハルは必ずしもキリスト教徒の支配に敵意を持っていたわけではない。むしろ、同じイスラム教を信仰するにもかかわらず、アフリカから来たベルベル人に対して強い反感をもち、少なくとも12世紀まではキリスト教徒の支配に親近感を持つ場合もあった。サアグンの年代記はカスティリア王アルフォンソ6世が死亡したとき、キリスト教徒のみならずユダヤ人もムスリムも嘆き悲しんだと伝えている。またカスティリア王アルフォンソ7世がムラービト朝を撃退して凱旋したとき、トレドのキリスト教徒や

ユダヤ教徒とともにムスリムもこれを歓呼して迎えたと言う。

確かにイベリア半島において宗教を超えた交流が生まれていた。ギリシャ文化をも継承するイスラムの学問や芸術は、ヨーロッパ中から有為のキリスト教徒を引きつけた。多くの文献がアラビア語からラテン語に翻訳された。その中にはイスラムの学術書だけでなく、アリストテレスら古代ギリシャの文献のアラビア語訳も多数含まれており、ヨーロッパで全く知られていなかった著作も少なくなかった。こうして、ヨーロッパ文化に大きな影響を与えた。その影響は世俗的学問のみならず、神学などにも及んだ。十字軍の時代に、このような両者の交流があったことは驚くべきことであろう。

このように一定の限界はあるにせよ、キリスト教徒の王がムスリムに一定の自治権や信仰の自由を与え、その学問を受け入れたのは何故か。それは寛容の精神の表れと見ることができるのか。寛容という言葉は非常に主観的な言葉で、その捉え方によって判断は変わるが、キリスト教徒がイスラム教を尊重しようとしていたわけでは決してない。カスティリア王アルフォンソ 10 世が定めた『七部法典』に、ムハンマドの法は神への冒瀆とされ、神や乙女マリア、そのほかの聖人を罵ると鞭打ちで罰せられ、3 度犯したら舌の切断が定められて、ムスリムは「我々と信仰を同じにしないにもかかわらず、我が領土で暮らすことを許しているのだからそのようなことをすれば罰せられるのは当然である」と述べられており、このような対応が決して寛容の精神によるのではないことを明らかにしている。また先に述べたように、宗教活動に様々な規制を加えたり、両者の接触をできる限り禁じ、髪型を規制したり、識別マークを身につけさせるなどしたことは、両者の相互理解による共存、融和的共生社会が目指されていたわけではないことを示しているように思われる。

キリスト教徒がムスリムに一定の自治や信教の自由を認められたのは、寛容 *tolerantia* ではなく、むしろ現実的な実用性 *utilitas* によると言うべきで

ある。キリスト教君主としては必要な措置であったということである。もしムスリムを追放したなら、労働力を補わねばならない。新たにキリスト教徒を植民させることは容易ではない。北部のキリスト教徒には、人口減を補うほどの余剰があったわけではない。従って、征服したキリスト教徒としては人口をある程度確保するためにはムスリムを留めるしかなかった。

また、ムデハルは一般的に農民としても職人としても勤勉で技術が高く、キリスト教徒の君主にとって有用であった。さらに、軍事的にも役に立ち、カスティリアでは 1385 年の対ポルトガル戦争で傭兵として用いられ、ムスリムに対するグラナダ戦争にも参加した。アラゴンでも、1285 年のフランスとの戦争や 1347 年の貴族の反乱に対してムデハルが用いられ、グラナダ王国の情報収集のためにも使われた。

ムデハルに対するキリスト教徒の態度は、この有用性から理解すべきである。ムデハルは征服地で社会を継続するために必要な存在であり、キリスト教徒としては彼らを受け入れざるを得なかった。もちろん、寛容の定義如何によっては、これを寛容と考えることもできるかも知れない。しかし、相互理解を前提とする寛容、人権や信仰の自由に基づく寛容をこの時代に求めることはできない。

2. シチリアのムスリム

シチリアではどうであろうか。まずシチリア島をめぐる経緯を簡単に振り返る。シチリア島は 535 年以来、東ローマ帝国の支配下に置かれていた。ムスリムがシチリアを最初に攻撃したのは 652 年のことだが、イスラムによるシチリア征服が本格化するのは 9 世紀前半のことであった。イスラム軍は 827 年にシチリア侵入を開始し、902 年には全島を支配下に置いた。その後、シチリアを支配する王朝はファーティマ朝 (909～)、カルブ朝 (947?～)、ジール朝 (1036～) と変わったが、結局、群雄割拠となり、その混乱の中でノルマン人の介入を招くことになる。

ノルマン人は 11 世紀初めに北フランスから南イタリアにやって来た。彼らは傭兵として活動を開始し、やがて領地を獲得し勢力を拡大する。

当初ノルマン人はローマ教皇と対立し、1053 年にはチヴィターテでレオ 9 世率いる教皇軍を撃破したが、その後、親ノルマン政策に転換した教皇ニコラウス 2 世から、1059 年にノルマン人の指導者のひとりロベルト・グィスカルドが「アプーリアとカラブリアとともに、将来のシチリア公」に叙任された。ロベルトは 1071 年までに南イタリアの征服を完了し、ビザンツ帝国領を消滅させた。この頃彼の弟のルッジェーロがシチリア島に介入することとなる。

ルッジェーロはメッシーナ、パレルモを占領して兄からシチリア伯に叙任され、ロベルトの死後、1087 年にアグリジェントを占領、1091 年にシチリア全島の征服を完了した。息子のルッジェーロ 2 世は 1112 年ごろにパレルモを都として支配の重心を半島からシチリア島に移し、南イタリアをも支配下に収めて、1130 年には教皇インノケンティウス 2 世に対抗していた対立教皇アナクレトゥス 2 世から戴冠されてシチリア王国を建国した。

ルッジェーロ 2 世以後、グリエルモ 1 世、グリエルモ 2 世らが続き、その後王権はルッジェーロ 2 世の娘コスタンツァと結婚した神聖ローマ帝国ホーエンシュタウフェン家のハインリヒ 6 世に移り、その子フリードリヒ 2 世に受け継がれた。

ノルマン人のシチリア再征服も、キリスト教徒のムスリムに対する宗教戦争とは言えない。確かに、ロベルト・グィスカルドを 1059 年にシチリア公に叙任され、シチリア征服のお墨付きを与えたのは教皇ニコラウス 2 世であった。しかし、その後教皇権とノルマン人は対立と和解を繰り返し、ロベルト・グィスカルド自身、グレゴリウス 7 世に破門されたことさえあったほどである。

ノルマン人がシチリアにかかわるようになったのは対立するムスリムの一方が援助を要請してことであった。まもなく、ノルマン軍とムスリム軍との戦争という形になるが、ルッジェーロの軍隊にはその後もムスリムがいたことは多くの史料で

確認できる。シチリア征服後、半島のキリスト教徒と戦うノルマン軍にもムスリム兵士がいた。その後のキリスト教徒のシチリア王も、ホーエンシュタウフェン家のフリードリヒ 2 世に至るまでムスリム兵士を用いた。シチリアではムスリムの君主がキリスト教徒を用いてキリスト教徒と戦うことはなかったが、この戦争もレコンキスタ同様、宗教を要因とした戦争と見ることはできない。

シチリア島のムスリムはノルマン人の征服後、アフリカに逃れる者もいたが、留まった者も少なくなかった。では、シチリア王国では支配下のムスリムをどのように扱ったのか。シチリアの場合も、イベリア半島のように、キリスト教君主への服従と税負担の代償に、信仰・財産は保証された。多くの都市はルッジェーロ 1 世に降伏したとき、協定を結んだ。パレルモのムスリムは、キリスト教徒の支配を受け入れ、年貢と賦役を行うことを条件に、生命の安全、イスラム教の信仰を認められた。またイスラム教の法と裁判官、裁判制度の維持も許された。シチリアのそのほかの多くの都市、たとえばカタニーヤ、マザーラ、トラパニなども同様の協定が結ばれたと考えられている。また、アラビア語が公用語とされ、交易の自由も保証された。ルッジェーロ 2 世が 1140 年に召集したアリアーノの大集会では、ノルマン人の支配に服する人びとの多様性故に、彼らの慣習、習慣、および法はそれが新たに公布される法に明白に反しないかぎり、廃止されるべきではないと宣言された。1168 年にはカタニーヤ司教ヨハネスが「ラテン人、ギリシャ人、ユダヤ人、サラセン人はそれぞれの法に則って裁かれる」ことを保証した。13 世紀のムスリムの地理学者アル・イドリーシーはシチリア王ルッジェーロ 2 世がムスリムにイスラムの信仰と法を認めたことを伝えて、「彼が完全な支配者となり、王権を確立したとき、彼はシチリアの人々の中で彼自身、正義の使徒となった。ムスリムの信仰と法は守られ、生命と資産は彼らとその子孫に保証された」と書いている。農村の場合は、ムスリムの領主がノルマン人の領主に代わったが、ムスリム農民はそれを受け入れて以前

同様の生活を続けていたようである。

イブン・ジュバイルは当時のシチリア島のイスラームの状況を報告している。彼は、12世紀半ばにイベリア半島に生まれたイスラームで、1183年から2年をかけてメッカに巡礼して帰国したが、その帰路、シチリア島に立ち寄り、約3ヶ月滞在した。彼によると、パレルモのイスラームは自分たちの裁判官（カーディー）を持ち、郊外にはキリスト教徒と交わらないですむ自分たちだけの居住区があり、自分たちの市場を持っていた。また、多くのモスクがあり、そこでは教師がコーランを教えており、イベリア半島では禁じられていたアザーン（礼拝時刻の呼びかけ）が行われていた、と伝えている。フトバと呼ばれる説教は、金曜日は許されなかったが、祭日には許されたと言う。また、トラパニでは断食明けを祝ってイスラームが太鼓やラッパを鳴らしながら行進しているのをキリスト教徒が素知らぬ顔で見逃していたと伝えている。イベリア半島では公然とイスラーム教を示すことは禁じられていたが、シチリアではある程度許されていたようである。

シチリア王国ではイベリア半島と異なり、アラブ人が役人として重く用いられることも少なくなかった。ノルマン人は少数で南イタリアにやってきたので、そもそもノルマン人だけで統治することは不可能であり、現地のラテン人やギリシヤ人、アラブ人も重んじた。初代のルッジェーロ2世時代は、財務局長官であるアミーラトゥスの多くはギリシヤ人であったが、アラビア語の文書も必要であったため、多くのアラブ人が書記として用いられた。

グリエルモ1世(1154-1166)と2世(1166-1189)の時代には政権の中核にアラブ人が現れる。この2人の王はルッジェーロ2世と異なり、政治にかかわろうとせず、官僚に任せていた。1160年にラテン系の宰相マイオが暗殺されてその独裁に終止符が打たれた後、王国最高顧問団が形成される。これは通常は3~5人からなる国政の最高機関であったが、それにアラブ人が名を連ねているのである。ピエトロ、リッカルド、マルティーノの3

人であるが、とくにピエトロは、グリエルモ2世の母で摂政であったマルガリータによって宰相とされ、他の2人の王国最高顧問を補佐役とした。アラブ人が王国の実権を握ったのである。もっともピエトロは自分の暗殺計画を知って、北アフリカに亡命したので、彼の政権は数ヶ月で終わった。この3人はいずれもキリスト教に改宗していたが、当時の年代記作者ファルカンドゥスによると、ピエトロは「名前と服装においてキリスト教徒であったが、心は(中略)サラセン人であった」。

グリエルモ2世時代、王宮侍従長官8名のうち、おそらく6名がアラブ人であった。土地に関する特別の業務を行う役所の長官であるドゥアーナ・デ・セクレティース長官も9名中2人は不明だが、残り7名のうち3人がアラブ人であった。両グリエルモの時代、アラブ人は王国の政権中枢に入り込み、大きな権力をふるったのである。

宮廷には多くのイスラームあるいは元イスラームがいた。ルッジェーロ2世、グリエルモ1世、そしてグリエルモ2世はいずれも学問を好み、アラビア語の素養があり、イスラームの学者たちとの会話を楽しんだと言われる。王は古いイスラームの城を改築したパレルモの宮殿や郊外の別荘で、イスラームに囲まれて暮らしていた。ルッジェーロ2世はイスラームに対する好意が際だっていたため、隠れイスラームだという噂が広まっていたと、イドリーシーが伝えている。

グリエルモ2世も、イスラームを信頼して身辺に置き、黒人奴隷の部隊を持っており、イブン・ジュバイルはキリスト教徒の王と言うより、むしろイスラームの王のように見えたと書いている。宮廷で王のそば近くに仕える小姓や侍女もすべて少なくとも大半がイスラームの信仰を隠し持っていた。王はそれを知りながら黙認していた。これもイブン・ジュバイルによると1169年2月4日にシチリアを大地震が襲ったとき、グリエルモ2世は周囲の侍女や小姓たちが神とムハンマドに助けを求めるのを聞いたが、それを咎めようとせず、「自分たちが崇めるものに、信じるものに加護を祈願せよ」と言って彼らの恐怖を鎮めたという。宮廷に

はキリスト教に改宗したが、イスラム教を捨てていない、いわば隠れイスラムといえる人びとがいたこと、またそのことを王が容認していたことがこのエピソードから窺える。詩人エボリのペトルスの本の挿絵は、グリエルモ 2 世を看病するアラブ人の医者や占星術師、王の死を嘆き悲しむムスリムを描いている。王が言語や宗教を異にする人々にも慕われていたことが看取できる。

ノルマン人のシチリア王はイスラム文化に親しみ、その学問や芸術を保護した。イスラムの地理学者イドリーシーはルッジェーロ 2 世に招かれ、1138 年頃にパレルモにやって来て、その後長らく留まった。王の依頼により世界地図を完成させ、その説明として『世界各地を深く知ることを望む者の慰みの書』=『ルッジェーロの書』を著し、それはイスラムの地理学を代表する地理書として評価される一方、西欧の地理学にも大きな影響を与えた。シチリアでも多くのアラビア語やギリシャ語の学術書が翻訳された。グリエルモ 2 世は、イブン・ジュバイルによれば、異国の医者や占星術師が王国を通りかかると、彼らを引き留め、故郷に帰るのを忘れさせるほどの巨額的生活費を与えた、と言う。

キリスト教徒の民衆もイスラム文化に親近感と憧れを抱いていた。イブン・ジュバイルはパレルモの女性たちがムスリム女性をまねて身を飾ったことを伝えている。一般のキリスト教徒もムスリムの風俗を優雅で洗練されたものと見ていたのである。

では、シチリア王国ではムスリムに対して寛容であったと言えるのであろうか。シチリア王国はイスラム教に敬意を持って、それを尊重していた、と言えるのであろうか。シチリア王国のムスリムは安心してイスラム教信仰を守れたのか。イブン・ジュバイルの旅行記は、シチリア島のムスリムがノルマン人支配者の寛容政策を享受したことも述べているが、一方で彼らが決して宗教的に安心してシチリア王国で暮らしていたわけではなく、むしろ、屈辱と苦悩と不安の中で暮らしていたことも伝えている。

たとえ、高位の役職に就き、大きな権勢を振るった人物であっても、明日のことは分からない。マフディーヤのフィリップは、イスラム教からキリスト教への改宗者で、ルッジェーロ 2 世に子供の頃から育てられ宮廷で大きな勢力を持ち、1153 年には王の命を受けて艦隊を率いて功績を挙げたが、おそらく背教を疑われて王の逆鱗に触れ、投獄、処刑された。

グリエルモ 1 世の時代、アラブ人のヨハルなる人物は国王侍従長官となったが、1162 年の諸侯の反乱に荷担し、処刑された。ファルカンドゥスは、王から褒賞とは反対に多くの不正と鞭打ちを蒙ったためと伝えている。王の不当な仕打ちに耐えきれなくなったのであろうか。その跡を継いだのはアラブ人のピエトロで、1159 年のマフディーア遠征で艦隊を率いて功績を挙げ、1166 年に幼いグリエルモ 2 世が王位を継ぐと、摂政となった母后マルガリータから最高の権力を与えられ、王国最高顧問団の筆頭となったが、暗殺計画を知ってチュニスに亡命したという。最高の地位を誇っても、その地位が安定しているわけではない。

アブー・アルカーシムは、改宗せず、イスラム教の信仰を守り通した。グリエルモ 2 世時代に高級官僚となりつた。イブン・ジュバイルによると、彼はシチリア島のムスリムの指導的立場にある名家の出身で、パレルモには優雅な城のような館を持っており、人びとに尊敬されていた。アラブ人の詩人アブー・アルフトーフ・ナスル・アッラーフは 1168 年にシチリアを訪れたときにアブー・アルカーシムに歓待され、その礼に『アブー・アルカーシムの徳の微笑む花』という本を著している。キリスト教徒も、もし彼がキリスト教に改宗すれば、島のムスリムはひとり残らず彼に従うであろうと考えていた、という。

このような人物であったにもかかわらず、ムワッヒド朝との内通の嫌疑をかけられ、王の保護を解かれ、自宅に監禁されて、財産も屋敷も没収された。その後許されたが、財産は返還されなかった。イブン・ジュバイルは彼に会ったが、彼はこの島の実情や内実を暴露し、ムスリムの国に移住

できるのなら、彼や家族が奴隷として売られてもよい、とまで語ったという。このように、シチリア王国のムスリムは、精神的圧迫と屈辱に耐え、それまでの生活がいつ崩れ去るか知れないという不安の中で暮らしていたのである。

パレルモに住むイブン・ズルアという法学者は圧力に屈してキリスト教に改宗した。自宅の向かい側にあったモスクを教会に改修し、すぐに福音書を完全に暗記し、キリスト教徒の法を学び、ムスリムの裁判もキリスト教徒の裁判も裁くことができた、と言う。しかし、イブン・ジュバイルは彼も信仰を隠していると教えられた、と言う。

意に反して改宗した宮廷の小姓や侍女がどのような気持ちで王に仕えていたのか。イブン・ジュバイルはメッシーナでアブド・アルマシーフという小姓と会ったことを伝えている。彼は召使いを下がらせて、聖地メッカやメディナについて質問した。聖地巡礼を熱望し、聖地から持ち帰った品物を分けてくれるよう懇願した。そしてイブン・ジュバイルに異教徒の統治下で奴隷のように暮らしながらも信仰を隠して密かに宗教的義務を守っている、と語った。

また、あるパレルモの名士はイブン・ジュバイルの同行者に娘を娶るか、ムスリムの国に連れて行って花婿を捜すよう懇願された。せめて娘だけでもイスラム世界に移住させたいという親の切なる望みであった。イブン・ジュバイルの同伴者はこれに同情して、頼みを聞き入れた。

シチリア島にムスリムとキリスト教徒が共存していたとはいえ、両者が一緒に仲良く暮らしていたというわけではない。居住地域は分かかれ、シチリア島ではムスリムの大部分は西部と南部に暮らしていた。都市でも彼らの居住区があり、彼ら専用の市場があったとイブン・ジュバイルが伝えている。

ノルマン治下のシチリア島は、異文化共存の地とされ、宗教的寛容が行われていたとされる。しかし、ムスリムは決して信仰の自由を享受して平和に暮らしていたわけではない。イブン・ジュバイルが伝えるエピソードはムスリムの目を通して

見た状況であり、ムスリムのイスラム教に対する思いが実際以上に強調されているかもしれない。しかし、彼らが様々な圧力や嫌がらせに合い、本心を偽って改宗し、いつかイスラム世界に移住できる日を心待ちにしながら堪え忍んでいたことは、否定できない。キリスト教徒がイスラム教を認め、尊重していたとは言えないのである。

では何故、シチリア王権は異教徒に一定の自治と信仰の自由を許したのであろうか。最大の理由はノルマン人が外部から来た、少数者であったと言うことである。シチリア遠征を始めたルッジェーロ1世は数百人の騎士しか従えていなかった、と年代記作者のマラテッラは記している。彼らは最初傭兵として活動したが、その後領土を得て領主となり、その拡大を目指すようになった。先に見たように、彼らはムスリムという異教徒と戦ったわけではない。もしそうであるなら、キリスト教徒の協力が期待できたであろう。しかし、基本的に領地や支配権をめぐる闘争であったので、宗教上の同胞であるからと言って必ずしもキリスト教徒が彼らに協力してくれるわけではなく、むしろしばしば同じキリスト教徒とも戦わねばならなかった。ノルマン人同士でさえ、争ったほどである。いや、むしろシチリア王権が最も警戒したのはノルマン人の封建諸侯であったと言えよう。グリエルモ1世の宰相マイオが暗殺されたのは、彼が進めた中央集権化で自分たちが抑えられると感じたノルマン人の封建諸侯たちであった。この事件は王国各地での大規模な封建諸侯の反乱を引き起こした。

ノルマン人の封建貴族を最も信用していなかったことは、宰相が誰ひとりノルマン人やその子孫でなかったこと、マイオ暗殺後国政を委ねられた王国最高顧問団の中にもノルマン人がほとんど見られないことにも示されている。

ノルマン人は少数であり、他のキリスト教徒も当てにならず、むしろ警戒せねばならない中で、ムスリムの徹底抗戦は避けねばならなかった。速やかに降伏させ、できる限り従順であることが望まれた。ルッジェーロ1世の軍隊に多くのムスリ

ムがいたことも、王がイスラムの信仰を容認する理由であったであろう。

ノルマン人は少数であったので、ムスリムの存在を認めなければ、社会が成り立たなかった。ノルマン征服期のシチリアの人口は約 50 万でその半数はムスリムであったと考えられている。キリスト教徒の移民でそれを補うことは不可能でした。ムスリムにはシチリア島に残って、農業や手工業などを続けてもらわねばならなかった。

従って、社会制度を大きく変えるのではなく、以前の制度を継承することも必要であった。そのためにはそれまでの土地台帳や住民名簿が必要であり、住民名簿はアラビア語で記されているので、アラブ人の役人が必要となった。

またムスリムが農民や職人として高い技術を持っていることも知られていた。ムスリムはそれまでヨーロッパではほとんど知られていなかった、レモン、ダイダイ、綿、桑、ナツメヤシ、ウルシ、ピスタチオ、パピルス、メロン、稲、サトウキビなどをもたらし、蚕も飼われた。またペルシャ起源の灌漑技術を導入した。それによってシチリア島は様々な果実にあふれる、肥沃で豊かな島となった。イブン・ジュバイルやアル・イドリーシーも果樹に覆われた豊かなシチリア島の様子を伝えている。そしてそのような景観はムスリムがシチリア島からいなくなる 13 世紀には失われ、果物、野菜、インディゴなどの畑の大部分は穀物畑に変わってしまった。その意味でも支配者にとって非常に有用な存在であった。

以上のように、ノルマン人治下のシチリア島をキリスト教徒とムスリムが共存し、互いに尊重しあった寛容の地と言うことはできない。少数派のノルマン人にはシチリア島からムスリムを排除するという選択肢は当初なかった。彼らにはできるだけ速やかにムスリムを従わせることが必要であった。また、ムスリムの市民や農民が必要であった。しかし、このような状況は 12 世紀後半以降、大きく変化することになる。

とくに北イタリアからキリスト教徒がシチリアに移住し、一方でムスリムがシチリアから王国外

に移住していったため、人口におけるキリスト教徒の割合が高まってムスリムへの反感が強まった。公用語がアラビア語からラテン語に変わるなど、王国のキリスト教的性格が強まり、またムスリムを保護してきた王権の弱体化により、ムスリムへの迫害や攻撃が押さええられなくなった。グリエルモ 1 世時代、宰相マイオが殺された翌年の 1161 年、騒乱の中で多くのムスリムがキリスト教徒に殺され、農村でもムスリム農民は虐殺から免れるためにムスリムの多い南部に逃げたり、山中に逃亡したりした。ファルカンドゥスによれば、反乱を起こした貴族たちが宮殿に押し入り、さまざまな記録を廃棄するとともに、宮殿内外でムスリムを虐殺した。北イタリアからの移住者が近隣のムスリムを虐殺したこともあり、軍隊の中でムスリムとキリスト教徒の兵士が殺し合ったこともあった。

グリエルモ 2 世が 1189 年に死去すると、ルッジェーロ 2 世の孫で王の叔母に当たるコスタンツァと結婚していた神聖ローマ帝国の皇子でまもなく皇帝となるハインリヒ 6 世がシチリア王位の継承権を主張して王国に侵入し、ドイツ人の支配に反発する勢力がレッチェ伯タンクレードをシチリア王に選出、半島ではこれへの反発も起こり、さらにムスリムが蜂起するという事態となった。ハインリヒは 1197 年に急死し、まだ 3 才の幼児であった息子フリードリヒがシチリア王となる。摂政であった母のコスタンツァも世を去り、死の間際に息子の後見を教皇インノケンティウス 3 世に委ねる。こうして王国は様々な勢力が相争う分裂と混乱の時代を迎えた。ドイツでも幼年故にフリードリヒの皇位継承は認められず、帝位継承争いが勃発する。

そのような混乱と争いの中で成長したフリードリヒは政治的混乱を押さえて 1212 年にドイツ王となり、1220 年には教皇ホノリウス 3 世から皇帝として戴冠された。さらにシチリア王国での王の支配の回復に努め、抵抗する諸侯を押さえ込み、ムスリムの反乱を鎮圧し、彼らの多くを半島南部のルチェーラに強制移住させ、ムスリムのコロニ

一を創設した。こうしてシチリア島のムスリムはほぼ姿を消すことになったのである。

4. おわりに

イベリア半島もシチリアも、最初キリスト教徒の支配下にあったが、ムスリムが征服し、それをキリスト教徒が取り戻すという歴史を持っている。しかし、このような戦争は決して宗教戦争ではない。どちらも異教徒と結んで宗教的同胞と戦うことをためらわなかった。宗教は決してこれらの戦争の主因ではなかった。君主は自国を守り、いわば国益を最大にするために、戦ったのである。

また、これらの地域は、異文化共存の地として、宗教的寛容が広まっていたとも言われてきた。確かに、一定の自治が認められた。財産も保証された。シチリアでは、役人や高位の官僚になることもあった。制限はあったが、イスラム教の信仰を守ることもできた。また文化交流というか、イスラムの高度な文化がキリスト教世界にもたらされると言うこともあった。

しかし、キリスト教徒治下のイベリア半島でもシチリアでもイスラム教が尊重されたわけでは決していない。寛容からはほど遠い状態であった。キリスト教徒の支配者がムスリムの存在を認めたのは、あくまでキリスト教側の事情であったのである。

イベリア半島の君主にとっても、シチリア王にとっても、彼らにとってはそれが自分に役立つかどうかの問題であった。寛容と敢えて言うならフーベンのように実用的寛容 *practical tolerance* ということはできるが、やはり、寛容 *tolerantia* よりも有用性 *utilitas* で理解すべきではないかと考える。

筆者が関心を持っているルチェーラのムスリム・コロニーについても同じような理解が可能であろう。そこでも一定の自治と宗教的自由が認められたのであるが、これについて、たとえばフリードリヒについての詳細な研究書を著したヴァン・クリーヴはルチェーラのムスリム・コロニー創設をフリードリヒの啓蒙性と寛容の表れとし、これを受け入れない教皇の狂信や偏見と対比して

いる。強制移住によるコロニー創設を寛容の表れとは言えまい。これもフリードリヒにとっての有用性で理解すべきであろうが、これについては今後の課題としたい。

主要邦語参考文献

家島彦一『イブン・ジュバイルとイブン・バットゥータ』、山川出版社、2013年。

伊東俊太郎『12世紀ルネサンス—西欧世界へのアラビア文明の影響—』、岩波書店、1993年。

イブン・ジュバイル『旅行記』（藤本勝次、池田修監訳）、関西大学出版部、1992年。

同『メッカ巡礼記3』（家島彦一訳）、2016年。

尾崎明夫「レコンキスタとイベリア半島」、『西欧中世史〔中〕』、ミネルヴァ書房、1995年。

尾崎秀夫「教皇インノケンティウス4世の対異教徒理論」『神戸海星女子学院大学・短期大学紀要』33号、1994年。

芝修身『真説レコンキスタ』、書肆心水、2007年。

芝修身『古都トレド 異教徒・異民族共存の街』、昭和堂、2016年。

関哲行他編『世界歴史大系 スペイン史1』、山川出版社、2008年、70～259頁。

高山博『中世地中海世界とシチリア王国』、東京大学出版会、1993年、53～54頁。

同『神秘の中世王国』、東京大学出版会、1995年。

同『中世シチリア王国』、講談社現代新書、1999年。

同『中世シチリア王国の研究』、東大出版会、2015年。

林邦夫「中世スペインのマイノリティームデハル」『岩波講座世界歴史第8巻』、岩波書店、1998年。

林邦夫他編、『ヨーロッパの中世3 辺境のダイナミズム』、岩波書店、2009年、218～242頁など。

山辺規子『ノルマン騎士の地中海興亡史』、白水社、1996年。

M・ワット『イスラーム・スペイン史』（黒田寿郎・柏木英彦訳）、岩波書店、1976年。

本稿は2016年6月4日、本学で行われたカトリック大学キリスト教文化研究所第29回連絡協議会での講演の原稿を改訂・加筆したものである。